



—人生はプロセスが大切— 「日々を誠実に生きる意味」

広島女学院
院長・学長
三谷 高康



年末年始になると墨蹟の掛け軸を我家の床の間に飾ることにしています。

そこには「桃栗三年、柿八年、達磨九年、人間一生」と書かれています。もう60年近くも前になります、私は北陸の高岡にあります臨済宗の僧堂、雲水修行をする寺ですが、そこで一年ほど暮らしたことがありました。寺を去る時、老師が「これはお前のことや。もって帰れ。」そうって手渡してくれました。

「桃や栗は植えてから3年で実がなる。柿は8年だ。禅宗の開祖の達磨大師は9年間も岩の壁を相手に座禅を続けて、ようやく悟りを開いた。凡人であるお前のような人間は、一生修行が必要だ。」と、この書は語りかけています。20年近く研究をつづけても一向に成果が上がらない。30年も40年も働き続け、定年間近と思うと、実りのなさについついあせってしまう。それが私たちです。しかし、この掛け軸が言うように、人生は成果ではなく、いかに生きたか。そのほうが重要だと教えられると、あせる気持ちもやわらぐものです。

ですから、昔の人は、人生をこの世の旅と考えました。芭蕉は「奥の細道」で、人生を旅に喩え、しかも其の旅も、目的地にたどり着くための旅ではなく、むしろその途上で出会う人々や景色こそが重要なのだと伝えました。つまり人生はプロセスだというわけです。

それでは私達はいかに生きるべきなのでしょう。

内村鑑三はそれを的確に表現しています。彼の著書の一つに「後世への最大遺物」という短い作品があります。

この書で、内村はキリスト教徒の立場から「清い欲望」について語り始めます。自分は人間として生まれた以上、いずれこの世を去るが、その時、何かを残していきたい。そういう欲望は清いものと言っても差し支えはない。そう切り出します。

そして、どのような清い思いがあるのか考察を続けます。

まず、巨万の富を残して日本を救ってやりたいという思いである。しかし、金を儲けるのは誰にでもできる技ではない。金を貯めることに奔走して、清らかでない方向に進むことは避けられない事実だ。

それでは「事業」はどうか。土木事業などが好例だ。立派な橋を架ける。見事な道をつける。しかし、これも地位や能力があっても、それ以上に社会や友人のサポートが必要である。これも実現は難しい。

それでは一体、なにが残されているのか。内村は、それは思想だと思いつくのです。思想ならその精神を筆と墨をもって紙の上に残すことが出来るのではないかと。そして、後世に影響を与えることが出来る。しかし、これも誰にでもできる業ではない。誰でもが文学者や思想家になれるものでもないからだ。彼はここで絶望するのです。しかし、その直後、彼はハタと気づきます。

今までの三つよりも大きく、誰にでもできることがある。それはなにか。内村は続けます。

この世は絶望や悲観の世ではなく、希望と喜びの満ちた世である。生きるに値する素晴らしい世の中だ。このことを証する生涯こそが自分のできる最大の遺物であり、これこそ高貴な生き方と名付けたいと思う。そう内村は結ぶのです。

現代はテクノロジーの発展によって、あらゆるものを取り巻く環境が複雑さを増し、将来の予測が困難な状況になっています。この近年、新型コロナウイルスの世界規模の大流行や、地球温暖化に伴う気候変動と異常気象、台風や地震といった災害等、予測が困難な自然災害が次々と起こっています。また、少子高齢化が深刻な問題を生み、加えて貧富の差がますます激しくなってきました。こうした中で、若者たちは将来に不安をかかえながら今を生きています。しかも、国際情勢ではウクライナとロシアとの交戦が長期化し、またパレスチナのガザ地区でのイスラエルの激しい攻撃が、グローバル社会を巻き込む深刻な問題となっています。

こうした時代の状況下でも、人生は生きるに十分価値あるものであり、世界はまだまだ希望に満ちていると証し続けることは、平和教育を重んじ、次の世代を育む広島女学院にとって大きな使命ではないかと思うのです。そして、私ども一人一人も人生のプロセスを誠実に歩むことが求められているのではないのでしょうか。

音楽と広島女学院

～新生した学校でゲーンズ校長が始めた特記すべき学科は音楽であった。音楽は確かに、彼女が広島の教育界に紹介した多くのすぐれたもののうちの一つであるといえる。～
『ゲーンズ先生物語』小田切 快三編 (1996) より

幼稚園の歩みの中の音楽教育

園長 古重 歌織

幼稚園の歴史と音楽教育の結びつきは大変深く、保育の内容充実と発展は、常に音楽と共にあると感じています。現在も幼稚園の子どもたちにとって音楽は欠かせないものであり普通の遊びの中でも口ずさまれ、自然に体が動き出したり、踊り楽しんだりして遊びの中に取り入れられています。また、日々の讃美は勿論、わらべ歌や童謡などを含め歌い親しむ活動が毎日の保育の中で展開されています。

ゲーンズ先生来日の際に船でピアノを運ばれたことはよく知られたエピソードであり、音楽を授業に取り入れ音楽科が設置されたことなど、これまでの歩みに欠かせない音楽と教育の出会いと言っても過言ではないのではないのでしょうか。

また、日本の幼児教育に初めてスキップを取り入れたとされているファニー・コードウェル・マコーレーはゲーンズ先生休暇帰国中に来日した際、音楽・遊戯・恩物遊戯の中にリズムを取り入れ、スキップを指導されたとの記録があります。(「幼稚園教育90年史」(当時文部省)) マコーレー自身の手記には幼稚園教育に取り入れる為、保母養成科の授業の際スキップの指導にあたらせ生徒たちが四つん這いになりながら先生の指導を吸収しようとした様子がユーモラスな表現で記録されています。

また、マコーレーに加えマーガレット・クックの着任により更に



リズムに乗ってスキップ

音楽教育は発展していき、おそらく日本で初めてのリズム・ゲームの曲集もまとめられ保育に用いられたとされています。(広島女学院120周年史「小さきものへの大きな愛」(2006年10月1日発行による))

情熱を持って幼児教育に力を注いでくださった先達の先生方のお働きによって、現在の音楽表現による活動が展開できる喜びを改めて感謝する思いと担うべき責任の重さを実感しています。

中学・高校の音楽教育について

音楽科教諭 長谷川 史

中高では、様々な時・場所で音楽に触れる機会があります。それは特別なことではなく、毎日の学校生活の中で、ごく自然に音楽が存在しています。普段から女学院の始まりは教員も含めて、必ず讃美歌を歌うことから1日が始まります。生徒も教員も関係なく、同じひとりの人として、共に神様へ祈りを捧げ、1日をスタートできる大事な瞬間だと感じています。また、誰かが讃美歌を口ずさめば一緒に歌ってしまうのも、校内でよく見かける光景の一つです。その醍醐味が、クリスマス行事である中学の讃美歌コンクール、高校のハレルヤ合唱です。練習が音楽の授業で始まると、授業だけでなく教室を移動している廊下からも生徒たちの歌声が聴こえます。学校の中はクリスマスの訪れを生徒の歌声を通して知ることができるのです。

また、9月に行われた音楽鑑賞会はゲーンズホールに広島交響楽団の皆さんをお招きしました。ホールに足を入ると、目に飛び込んでくる楽器、耳に入ってくる音色。そこはまるで音楽ホールのように、生徒たちの喜びの声と共に一瞬にして心を奪われました。楽団の方々と触れ合う時間もあり、全身で音楽を感じる時を過ごしました。実は、今から40年前の1983年4月25日にゲーンズホールオープニングコンサートとして、広島交響楽団による演奏が行われた記録が残っています。時を経て、このホールでオーケストラの演奏を聴けたことを嬉しく思いました。終演後に「生徒の皆さんが盛り上げてくださり、楽団員も演奏に熱が入っていました。」とメッセージを頂きました。聴衆として、時には静寂さえも音楽にしてしまう生徒を素敵だと感じました。



広島交響楽団による音楽教室

また、音楽系のクラブも盛んに行われており、マンドリン部は毎年全国大会に出場し好成績を収めるなど、校内だけに留まらず活躍の場を広げています。

コロナ禍で一時期開催できなかった第37回メサイアコンサートや卒業生による第24回チャリティーコンサートも例年通りゲーンズホールで行われ、多くのお客様に恵まれました。社会貢献できる一つの道具が音楽であることは、ゲーンズ先生に繋がっているようで心強く感じています。

今年も中高の長い歴史に、新たなページを加えることができたいと感謝しております。そして「新しい歌を主に向かってうたい美しい調べと共に喜びの叫びをあげよ。」の御言葉通り、これからも新しい心で神様に向かって「新しい歌」を生徒と共に捧げたいと思っております。

大学の音楽活動 キリスト教音楽に関する活動について

大学オルガニスト 玉理 照子

大学の音楽活動には種々ありますが、特にここではキリスト教音楽に関する活動を取り上げます。キャンパスの中央に位置するゲンスチャペルから学生が弾くオルガンの響き、聖歌隊の歌声が聞こえる事が如何に豊かな時である事かと今改めて思います。

学生オルガニストは毎週木曜日昼時間に守られる木曜日チャペルの奏楽を担当します。頌栄館屋上チャペル時代からオルガニストは奏楽を担当しておりますが、その後ゲンスチャペルが建てられ、2010年にパイプオルガンが設置されてからオルガニスト希望者も増え常時10名前後（現在8名）在籍します。入学前からそれを夢見て入ってくる方もいます。毎週の礼拝奏楽の他、7月と12月にはコンサートがあります。卒業時にはペダル付きの難曲を弾けるようになる方も多くいます。

聖歌隊のルーツは1950年に発足したクワイヤです。諸先輩方が築かれた歩みを引き継ぎ2008年宗教センターに属する組織「聖歌隊（クワイヤ）」として再出発し活動しております。式典、宗教週間での賛美、オープンキャンパス、あやめ祭コンサート、各教会を訪問し賛美するキャラバン（コロナ禍前まで）等々活動しております。私が指導担当しているこの約20年間では30名という時もありましたが、やはりコロナ禍という歌えない時期の影響は大きく、それでも何の活動もできない中で入隊し聖歌隊の存在を守って下さった3年生には感謝の一言です。11月12日のあやめ祭コンサートでは沢山の来場者の中で8名のメンバーが賛美をお捧げしました。

昨年の6月に新しい賛美の形がスタートし、聖歌隊と大学教職員学生有志でゴスペルを合唱するHJUゴスペルプロジェクトが結成されオープンキャンパス等で賛美しました。特に当初予想し



あやめ祭聖歌隊コンサート

なかつた沢山の恵みを感じるのは垣根を越えてつくる賛美だからでしょうか。3月の卒業礼拝で「光の子になるため（21-509）によるゴスペルバージョン」を歌いました。原曲賛美歌は学生達の大好きな賛美歌で「一人一人の歩みに神様の光が注がれるように」という皆の祈りに溢れた時でした。



木曜日チャペル学生オルガニストコンサート

120年前の女学院にマコーレー先生は日本で初めて「スキップ」を紹介されました。このスキップのように体も心も躍動する賛美をめざして、神様からのメッセージをしっかりとお伝えする賛美をこれからもお捧げしていきたいと思っております。

「明子さんのピアノとパルチコフさんのヴァイオリン」(西村文／廣谷明人／^{ふたつ}二口とみゑ 著)が出版されました

中高図書館司書教諭 抹香 加緒理

被爆ピアノと被爆バイオリン、どちらも広島女学院にゆかりのある楽器です。

広島平和記念公園内の被爆建物「レストハウス」2階に展示してあるピアノは、広島女学院附属小学校、広島女学院専門学校に在籍した河本明子さんのピアノです。1945年8月6日、明子さんは勤労奉仕中に被爆し、翌日19歳で亡くなりました。アメリカで仕事をはじめていた両親のもと1926年ロサンゼルスで生まれた明子さんは、父源吉さんから贈られた米ボールドウィン社製のアップライトピアノを演奏するのが大好きだったと、ふたりそれぞれが書き残した日記から窺い知ることができます。

一方本学院歴史資料館所蔵の被爆バイオリンは、本校音楽教師であったセルゲイ・パルチコフ先生が被爆しながらも生き延び生涯大切にされたものであり、本学百周年記念行事（1986年）に来広した娘のカレリアさんから譲り受けました。

著者のひとりで広島女学院の同窓生でもある^{ふたつ}二口とみゑさんは、一般社団法人「HOPEプロジェクト」を立ち上げ、明子さんのピアノを再生・継承し平和活動を仲間と続けておられます。中高には2016年に「明子さんのピアノ」を持ちこみ、生徒によるコンサートを開催、2021年には「平和を祈る週」に講師としてお話してくださいました。二口さんが明子さんの遺した日記を読み解く作業にあたり、学院の資料について歴史資料館元職員、西原真理子さんとともに微力ながら中高図書館もお手伝いしました。当初は明子さんとパルチコフ先生との接点を見つけることはできず、ふたつの楽器の物語は全く別々のものでした。ところが2020年に

パルチコフ先生（中央）と最前列右端にタンバリンを持った明子さん（1936年）
アンソニー・ドレイゴ氏提供

パルチコフ先生の孫のアンソニー・ドレイゴさん（カルフォルニア州在住）が先生の広島時代の写真を保管していることがわかります。共著者の廣谷明人さんはすぐに連絡を取り、パルチコフ先生と明子さんが一緒に写った写真が発見されました。ここから再度資料を探しなおし、2023年8月、ふたつの楽器の物語は1冊の本となって出版されるにいたりました。この本は出版に関わったすべての方々熱意の賜物です。

時を経てふたつの楽器は国内外で共演の機会を与えられ、平和のメッセージを届けてくれていますが、これは偶然ではなかつたのだと思わずにはいられません。広島女学院の歴史とともに、ゆかりの楽器の物語を是非ご一読いただければと思います。



クリスマス特集

幼稚園クリスマス諸行事

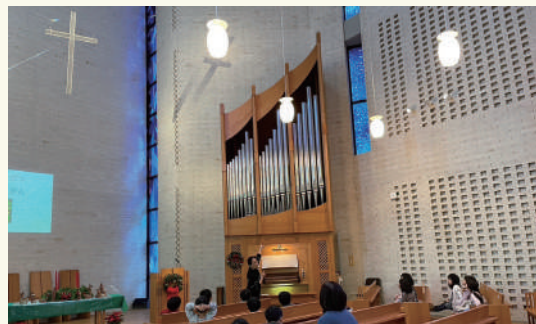
教諭 島有里咲

幼稚園のアドベント。アドベントクランツに週ごとに灯りが増え、クリスマスの訪れを心待ちにして過ごします。「アドベントクランツに」の歌をうたいながら蝋燭に火をつける間、目を輝かせてじっと灯りを見つめる子どもたち。あたたかい光に寒さも少し和らぐようです。また、アドベントカレンダーをめくることも子どもたちは楽しみにしています。一枚ずつめくられていくカレンダーを見つめ、友だちと一緒にあと何枚かなど数をかぞえたり、自分がめくる番になると飛び上がって喜んだりと毎日のお楽しみになっている様子です。

クリスマスといえばなんだろうと子どもたちに問いかけると、「サンタさん!」「プレゼント!」と口々に話してくれますが、本当のクリスマスには、尊い意味があることを伝え、保育室での礼拝を通して、暗闇の中に現れた一つの光であるイエスキリストの降誕を知っていきます。年少児にとっては初めての幼稚園でのクリスマス。そして年中児にとっては様々な経験を重ねる中で、よりイエス様の存在を近くに感じ思いを巡らせる時です。年長児は神様から与えられたお仕事としてページェントを演じます。一年前に年上のお兄さんお姉さんが演じる姿を見た経験を踏まえ、物語を伝える側になって心を込めて取り組みます。人前に出ることに慣れず、恥ずかしく思う子どもももちろんいます。でも、ページェントを上手くやり切ることが大事なことはないのです。一人一人が、今生きていること、今ある当たり前と感じている日常に感謝しながら、演じてい

る人も、見守っている人も一緒になって礼拝を守り、つくり出していくことに重きを置きたいと考えています。

12月20日、砂本記念講堂でのクリスマスページェントでは、年長児の子どもたちは緊張しながらも自分の役を丁寧に演じる姿がありました。年中少児も聖歌隊として参加し、みんなで礼拝を守りました。これからも、神様の愛に包まれ世界の平和を祈りながら日々を過ごしていきたいと思ひます。



ゲンスチャペルにて、クリスマスの物語も交えたアドベントコンサート



クリスマス「ページェント」

中学・高校クリスマス諸行事

宗教教育委員会 金清洛

中学校讃美歌コンクールは、クリスマスへの準備として行われる学校行事です。数か月前から音楽科の先生のご指導のもと、クラス一同が心を合わせ、練習を積み重ねた努力が美しいハーモニーを生み、クリスマスの喜びを共に分かち合えるような恵みの時でした。

中学クリスマス礼拝は、讃美歌コンクール各学年課題曲の合唱を行いました。ボリュームあるハーモニーがホールに響きわたり、学年毎の合唱がまさに天使の歌声のようでした。YWCA部（ハンドベル演奏）、合唱部、放送部（聖書朗読）の生徒たちが奉仕してくれました。

高校クリスマス礼拝は、4年ぶりにコロナ禍以前の形式でゲンスホールにて行われました。今年は5年ぶりに高校演劇部による『空き部屋なし』の演劇が行われ、クリスマスを通して示された「善い知らせ」の意味について共感することが出来ました。クリスマスのハレルヤ合唱は吹奏楽部、オーケストラ同好会、有志生徒の演奏で、全校生徒による力強いハレルヤが響き渡りました。宗教委員（司会）、放送部（聖書朗読）、音楽部（合唱）、奏楽などをそれぞれ生徒たちが担当し、女学院の豊かさを味わうひと時でした。

夜の「女学院クリスマス」は、今年は一般公開で行い、在校生と保護者、卒業生、受験を考えている小学生と保護者や地域の方々を対象として事前申し込み制で実施しました。ホール1階席

が埋まり、2階席まで参加者がありました。高校宗教委員・高校放送部・中高YWCA部、高校生有志による聖歌隊が協力してくれました。

中高のクリスマス礼拝のメッセージは、鳥井新平牧師（近江平安教会）が、夜の女学院クリスマスは、石塚多美子牧師（瀬戸田バプテスト教会）がメッセージを担当してくださいました。各礼拝では、イエス・キリストの誕生を通して示されたクリスマスの真の意味について語って下さいました。

今年もイエス・キリストの誕生を祝うクリスマス礼拝を通して、神と共に働くものである女学院の豊かさを祝うひと時でした。



讃美歌コンクール



クリスマス特集



広島女学院大学 第23回クリスマスツリー点火音楽礼拝

大学宗教委員長 栗津原 淳

第23回クリスマスツリー点火音楽礼拝がアイリスガーデンで行われ、大学正門横のドイツウヒに明かりが灯りました。学生、教職員、ゲーンズ幼稚園児やご家族、ご近所の方々など70人ほどの方が集まってくださいました。

マタイによる福音書1章18-25節の朗読と祈禱、聖歌隊による「O Holy Night」の歌唱後、院長・学長 三谷高康先生、生活デザイン学科 細田みぎわ先生、日本文化学科4年 八方詩恩さんが点火スイッチを押してくださいました。参加者はひとり一人キャンドルを持って灯りをつなぎ、「きよしこの夜」を歌ってクリスマスの始まりを祝福しました。礼拝後はキャンドルやツリー、月をバックに楽しそうに写真を撮る姿、お子さんたちの嬉しそうな笑顔があちこちで見られました。



夜空にひかりを

広島女学院大学 クリスマス音楽礼拝

大学宗教委員 前田 美和子

12月19日、2023年最後の「キリスト教の時間」は、A.O.カルテットのみなさんとソプラノ歌手の昆野智佳子さんを迎えてクリスマス音楽礼拝を行いました。

チャペル委員の学生たちが点火してくれたロウソクの灯りのもと、聖歌隊の「O Holy Night」、A.O.カルテットと昆野さんによる『あめにはさかえ』他4曲が演奏され、参加した170名の学生と教職員がその音色に包まれました。

栗津原淳大学宗教委員長からは、イエス・キリストはいつも私たちの傍らに、また困難の中にある方々の傍らにいてくださる神であり、クリスマスはその神が私たちに与えられた恵みを思い返す時にしたいというメッセージが語られました。

美しい調べの中、心の平安が奪われ、困難の中にある方々の事を胸に思い、主が共にいてくださることを祈る礼拝でした。



A.O. カルテットの皆さんと昆野さん

第37回クリスマスコンサート メサイア

クワイヤ 井内 花音

今年も無事にメサイアコンサートを開催できたことに、指揮者の星野晴夫先生を始め、ご参加くださった皆様、ご来場くださった皆様、様々な準備にご協力くださった全ての皆様方に感謝申し上げます。今年はコロナによる昨年の様な入場者数の制限がなく、たくさんの方にご来場いただくことができました。今年の大学クワイヤは、コロナによるサークルの休止期間の影響で4年生がおらず、3年生が最高学年となりました。人数も例年と比べても少人数になってしまいましたが、その分それぞれとコミュニケーションをとる機会が増え、学年を気にすることなく活動することができました。

今回は、大学クワイヤの責任者として参加させていただきました。参加としては二度目で、例年との違いも多く不安もありましたが、とても充実した良い経験となりました。練習の時は、星野先生のご指導の下、他愛ない話や例え方で笑顔の絶えない、楽しい時間の中で練習をすることができました。本番当日は、朝から雪がちらつきとても寒い日になりましたが、たくさんの方にご来場いただき、とてもうれしくありがたい気持ちで歌えました。ソリストの方々の歌声に聞き惚れ、テノール、バスの男性パートの方々の力強い声に支えられ、ソプラノ、アルトの女性パートの方々と声を合

わせ、会場の皆様も含めホール全体と一体となる感覚はとても素晴らしいものでした。最後に会場の皆さんと一緒に歌う「きよしこの夜」でもたくさんの方が口ずさんでくださり、とても素敵な一日となりました。

コンサートが終わった後もたくさんの方が、「素晴らしい」「素敵だった」とお声がけくださっているのを見て心から参加してよかったと思いました。

今回は、たくさんの方々とても貴重な体験をさせていただいたことにあらためて感謝申し上げます。また来年も皆様とこの素敵な体験ができることを、また、「メサイア」がこれからもずっと続いていくことを願っています。



2023年12月17日 広島女学院ゲーンズホールにて

大学

新しい留学プログラム、グローバル・アウ リーチ・プログラム in カナダ

国際英語学科 磯部 祐実子

学科の海外研修にカナダ留学が加わりました。プリティッシュ・コロンビア州にある、オカナガン・カレッジへの4ヶ月の留学で、8月末から7名の学生が留学しています。大学のあるケロウナは、オカナガン湖を囲むように街や住宅地、自然が広がる都市です。避暑地としてカナダやアメリカの各地からの観光客も多く、著名人が別荘を持つなど、落ち着いた雰囲気の安全な街です。

留学生活はというと、学生たちは、大学附属の語学施設で、レベル分けされたクラスで学びます。学生の状況に合わせて丁寧に指導が行われ、学生たちも英語力の伸びを感じながら学ぶことができている。留学生が多い大学で、クラスにも様々な地域や文化のバックグラウンドを持つ学生がいます。本学の学生たちは、最初は各地域の英語のアクセントに苦労したようですが、積極的に話すことで次第にコミュニケーションが取れるようになったということです。また、ホームステイ先ではホストファミリーと出かけたり、

感謝祭やハロウィンで楽しい時間を一緒に過ごしたりと、充実した時間を過ごしている様子です。

後日改めて、留学を終えて成長した学生たちの様子をご報告したいと思います。



オカナガン・カレッジのスタッフと学生たちと
(図書館にて)



大学キャンパス内の、本学学生たちが学ぶ校舎

芸北神楽の継承を目的とした取り組み 取材調査と報告書の作成

日本文化学科 柚木 靖史

日本文化学科では、「地域と文化」をテーマの一つとして掲げ、広島の伝統芸能である芸北神楽を取り上げ、地域行事のお手伝いや討論会など、さまざまな活動を続けてきました。学生には、地域の方々との交流をとおして、主体的に学ぶ力を身につけてほしいと考えています。

芸北神楽は、過疎化、少子化の影響により、神楽の演者の高齢化が進み、後継者不足という事態が生じています。このままでは神楽の伝統が途絶えかねないという状況でもあります。学生たちも、このような現状を認識し、神楽の保存のためにできることは何かを考えてきました。

2023年度は、神楽を後世に伝えるため、記録を残すという目的で、安芸太田町で活動する神楽団に取材を行いました。練習所にも入れていただき、衣裳や楽器、小道具などの写真を撮ることができました。そして、最終的には、「広島県安芸太田町神楽団調査報告書(2023)」として、安芸太田町に提出しました。

学生たちは、取材や記録執筆の活動をとおして、地方の伝統文化を自分自身の問題として認識したようです。今後も、安芸太田町と連携を続け、神楽や花田植、流鏝馬など、地域に根付いてきた伝統芸能を深く理解し、その継承のために行動できる学生を育てていきたいと考えています。



神楽団の取材終了後、安芸太田町にて

ライフキャリア特別セミナーI 韓国建築見学実習報告

生活デザイン学科 塚野 路哉

建築士課程では8月22日～25日に海外フィールドワークを実施しました。この科目は建築への理解を深めることを目的としたもので、優れた建築空間を実際に体感するため海外の著名な現代建築を巡ります。

今年度は4年生4名と3年生10名の計14名が参加し、韓国にて実習を行いました。事前学習にて建築作品を分析し、造形や思想などの建築特性をしっかりと学んだのちに、「DDP東大門デザインプラザ」、「アモーレパシフィック新社屋」、「ミメシスアートミュージアム」、「リウム美術館」、「Saya Park Art Pavilion

(Soyoheon)」、「Miradouro Sodae展望台」、「梨花女子大学校」、「ソウル大学校美術館」などを訪問しています。

また、事後学習として各自の体験を言語化する振り返りのプレゼンテーションを行うとともに、11月8日には建築士課程の1～4年生に向けた報告会を実施しました。

ライフキャリア特別セミナーI(韓国建築見学実習)の様子は、大学ホームページの学科ニュースや建築士課程の特設ページ(<https://www.hju.ac.jp/faculty/hlc/irad/>)にも掲載しています。ぜひご覧ください。



Soyoheonにて

1年生からの実践型授業 『栄養チャレンジ・ラボ』

管理栄養学科 佐藤 努

管理栄養学科ではオリジナルの実践型授業である『栄養チャレンジ・ラボ』が昨年度から始まっています。1年生は、脳科学の視点から、食行動やおいしさを感じる仕組みを探求する「脳科学ラボ」、食育活動を通して食の大切さを伝え、人と関わる喜びを体験する「食育ラボ」、食品開発の基礎を学び、魅力あるモノ作りに挑戦する「食品開発ラボ」から1つを選んで受講しました。

学期はじめに基礎知識を学んだ後、自分たちで企画や立案をしてグループワークを行い、新しい食品や料理の作成、現象の体験および考察を深め、その成果を卒論発表会を模した形で、1年生46名、2年生1名が発表しました。教員からの複数の質問に対し、学生たちは、取り組んで分かったこと、今後に向けて必要なことを、自分たちの思いをのせて回答しました。4年生の卒論発表に



ラボ活動発表会の一場面

は4年間の集大成の意味がありますが、このラボ活動発表会は、一人ひとりの現状と思いを踏まえて、今後の活動指針を見出すものとなったようです。最後の教員からの総評では、素晴らしい出来であったことや、今後の成長への大きな期待が寄せられました。今年も学生の確かな成長の足取りを見ることができました。皆で、さらに豊かな成長の日々に繋げていきたいと思います。

ものづくりチャレンジラボ! 子どもとつくる科学遊び研究会

児童教育学科 中山 貴司

「子どもとつくる科学遊び研究会」では、今年度10回の「ものづくりチャレンジラボ!～科学の不思議を楽しみ、失敗から学ぶ～」を実施しました。このラボは、児童教育学科の学生5～10名と早稲田小学校3・4年生の児童8名が一緒にものづくりをして楽しめます。

例えば、「どろだんご」や「ペットボトルロケット」、「(トトロ)どんぐりやじろべえ」「空気砲」「浮かぶビー玉オブジェ」などをつくりました。最終回は、これまでのものづくりから児童一人一人が再度挑戦したいものを選んでつくりました。

会場準備や当日の進行は、毎回学生が行っています。活動実施後の学生の振り返りには、子ども達と一緒に試行錯誤し、成功したときの達成感や嬉しさを味わったことや、子ども達がどんなことを楽



ペットボトルロケットと一緒に

しいと感じ、熱中するののかについて学ぶことができたと書かれていました。また、司会をしながら活動と活動の繋ぎ目をスムーズに行うことの大変さや、子ども達全体に目を向けながら、一人一人の活動の進み具合に気を配ることの大切さも記されていました。この活動を通して学生は、子どもと一緒に粘り強くものづくりをする楽しさや子どもへの理解、接し方など、先生として大切なことをいくつも学ぶことができ、充実した時間を過ごすことができました。

2023年度 秋季宗教強調週間報告

大学宗教委員長 粟津原 淳

10月17日(火) 「キリスト教の時間」の特別講師としてお迎えした在京ラオス人民民主主義共和国名誉領事である大野嘉宏さんは、『知られざる国ラオス その魅力と未来』と題し、ラオスにおける活動を詩篇37篇4節・6節と関連させながら語ってくださいました。様々な魅力が溢れた国であるとともに、50もの民族が使う言葉の違いもあり就学率が低いこと、周りを陸地に囲まれているがゆえに貿易が発展しづらいことなど、様々な課題を抱えている国であることも話してくださいました。豊かな自然と文化を活かして観光業を盛り上げていくために、国際的なホテルで働く人材を育てたい、そのために東京YMCA国際ホテル専門学校との連携を

図りながら、当地に学校を作る計画を進めているといったお話をしてくださいました。

翌18日(水)の特別講演会では『素晴らしい人生を送るために』と題して、18歳で家業の和装染色の町工場を継いだものの、自身の道を模索しながら22歳の時に工場とは別に会社を設立したこと、ワイズメンズクラブで奉仕クラブ理論を学び、ロータリークラブとも関わりながら他者との協力を進めていったこと、「人生は神の演劇。その主役は自分自身である」を実践し行動していくことで、人生の選択肢は広がっていくことを語ってくださいました。



「人生は神の演劇。その主役は自分自身である」を生きて

大学

第74回あやめ祭を開催いたしました

学生課長 今井 妙

「第74回あやめ祭」が2023年11月12日(日)に開催されました。昨年は新型コロナウイルス感染症対策として、原則、学内開催で予約制としたのですが、今年はその制限も無くし、1日のみではありますが、通常開催で行いました。

今年のテーマは「Bright & Brilliant ~光輝燦然」。このテーマを決めたあやめ祭実行委員たちは「一人ひとりの存在や未来が鮮やかに美しく光輝くように」との願いを込めたのだそうです。コロナ禍で高校生の時に文化祭などの行事をあまり経験できなかった世代でもあるので、やりたいことができず先の見えない不安な時代を抜けた学生たちに見えている未来なのだと感じました。

当日は、曇り空ではありましたが、ダンス部によるパフォーマンスで幕を開け、続いてスタートした野外ステージではフォークソング部が練習の成果を発揮した歌声と演奏を響かせました。各模擬店では終日列が続き、早々と完売するお店もありました。自治会アイリスは今年も専門業者のプロデュースで本格的なおばけ屋敷を開催、午後からのメインステージでは、吉本興業によるお笑いライブと大人気のピンゴ大会が行われたあと、あやめ祭の華である「ファッションショー」で生活デザイン学科の学生が製作した美

しい衣装が次々と登場し、「エンディング」で締めくくられました。この日はオープンキャンパスも同時開催し、学科展示や発表、研究室訪問なども行われました。

来場者は、学生はもちろんですが、地域住民と思われる方や子ども連れの方なども多く見られ、1,600名を超える来場がありました。41もの企業様からの快い協賛をいただき、様々な方からの支援に支えられた一日でした。皆様のご支援ご協力に心から感謝いたします。

実は、今年のおあやめ祭は、昨年のメンバーがほぼ全員引退してしまい、新しく実行委員会に加入したメンバーと、各学年・学科から選出されたプロジェクトメンバーにより実施することになりました。初めてこうした大型企画を体験する学生たちが多く、開催まで困難な道のりとなることが予想されましたが、このテーマどおり、学生たちからは、やってみたい企画のアイデアが次々と生まれ、模擬店も、飲食に対する厳しい衛生基準をクリアする工夫を凝らし、また、教職員へも出店協力を呼びかけることで、30を超える店が出そろい、コロナ前の賑やかさを取り戻しました。最初は何かから始めればよいのかわからなかったり、始めてみれば計画どおりに進まなかったり、お互いの主張で何度もぶつかりあったり、泣いたり笑ったりいろいろなことがありましたが、こうした困難を乗り越え、あやめ祭を実施できたことは、学生たちにとって大きな自信となり、自分の成長を実感できたのではないかと思います。学生課員として学生の成長を見守ることができるのを幸せに思います。



吹奏楽部によるパフォーマンス



模擬店では衛生にも気を付けて



ファッションショーは今年も華やかに

ハロウィンフェスタ ~年に一度のextraordinary (非日常)へ ようこそ~を開催

管理栄養学科 妻木 陽子

10月27日に開催されたハロウィンフェスタは、学生たちの協力と熱意を感じる非日常で楽しい1日となりました。

国際英語学科3年 灘井 典子さん

今年は、学生と教職員の皆様が交流を深める機会を作ることを目標に企画を考えました。スタンプラリーでは、学生が各事務室を回ることによって職員さんと繋がりを持つよう、先生コスプレコンテストでは、学生が先生へ直接投票シールを貼りにいくことで一緒に楽しむことができるよう工夫しました。パレードは、教職員、学生共に昨年よりいっそう気合の入った仮装が見られ、大いに盛り上がりました。

今年で2年目のハロウィンフェスタ。今後、広島女学院大学の定番のイベントになってくれれば嬉しく思います。



学生、教職員一緒にパレード



学内装飾を行う学生



G7広島サミット2023 第49回先進国首脳会議での学生の活躍

研究支援・社会連携センター長 入江 直子

2023年5月19～21日に「G7広島サミット」が行われ、本学の学生達もさまざまな形で活動しました。

1つ目は、「学生ボランティア」の活動です。「おもてなし担当」「通訳担当」として3名の学生が、各国首脳の配偶者をもてなすパートナーズ・プログラムでの料理等の配膳、国際メディアセンターや広島空港にて通訳・案内等を行いました。

国際英語学科4年 田窪 透子さん

パートナーズ・プログラムの研修では困難を感じる場面もありましたが、「二度とできない経験をさせていただいている」とポジティブにとらえ、少しでも本番を楽しめるよう日々練習を重ねました。ボランティアを通して、「平和を発信していく広島」の一部になれたのかなと思います。「会えてよかった」と言ってもらえたこともあり、国籍問わずそう思える出会いが、他の人や他の国を思いやる気持ちを生み、その気持ちや行動が平和に繋がるのかなと考えさせられました。

国際英語学科4年 榮田 莉子さん

今回最も強く感じたのはそのスケールの大きさです。国内外メディアの方々や政府機関・企業の職員の皆さんの姿を間近で拝見する度に、世界から注目される会議に自分自身も関わっていることを実感させられ、緊張感や高揚感を感じました。実際の活動では外国の方々だけでなく、空港職員の方や他大学の学生ボランティアたちなどさまざまな立場の方と交流する機会をいただき、これまで知らなかった知識や考え方を学ぶことができました。英語力を本当の意味で習得するためにはよく学び、そして実際に使う機会を増やすことが大切だと痛感しました。

国際英語学科2年 古川 采音さん

通訳として参加しました。メディアセンターの案内担当では、センターの配置や、必要な場所への行き方、バス乗り場の位置や、バスの時刻など、あらゆる情報を知っておかなければ何もできませんでした。そのため、少しでも早く、会場内や移動手段などの情報を頭の中に正確に入れ込むことがとても大変でした。初日の経験を活かし、2回目にはスムーズに答えられるよう取り組みました。世界のどこかでサミットが行われているとき、他人事、自分とは遠い出来事だとしか感じていませんでしたが、今回広島で開催され、ボランティアとして関わることで、サミットを開催するためにどれだけの人が関わっているのかなど実際に肌で感じることができました。

2つ目は、「次世代平和シンポジウム～広島からみんなで考える平和への取り組み～」への参加です。

国際英語学科4年黒木麻衣さん、日本文化学科1年田谷瑞紀

さん、生活デザイン学科1年藤原朱莉さん、管理栄養学科1年日谷実久さんの4名が参加しました。歌手のAIさん等平和構築等の分野で国際的に活躍されている方数名の登壇、登壇者と参加者とのトークセッションが行われました。このシンポジウムにはG7首脳配偶者で本学院中高卒業生でもある岸田裕子内閣総理大臣夫人、ジル・バイデン米国大統領夫人、ブリッタ・エルンスト・ドイツ連邦首相夫人、アクシャタ・マーティ英国首相夫人及びハイコ・フォン・デア・ライエン欧州委員会委員長夫人も参加されました。



G7広島サミット学生ボランティア解散式 (2023.6.11) にて



次世代平和シンポジウム (2023.5.19)

3つ目は、「パートナーズ・プログラム配膳担当者ユニフォームデザイン・コンペ」にて、生活デザイン学科4年瀬戸陽名さんのデザインが採用されたこと

です。ユニフォームには平和の象徴である折り鶴がモチーフとして使用され、どの国の方でも平和に関心のある人であれば一目で広島や日本の願う平和を感じてい



パートナーズプログラム岸田裕子総理大臣夫人主催昼食会 (2023.5.20)

ただけるデザインとなっています。

4つ目は、日本文化学科3年Yeo Gaeun (ヨ・ガウン) さんが韓国文化情報院スタッフとして活動したことです。

この世界的な行事に少しでも関わることができた学生たちは、これらの経験を単なる学生時代の思い出に終わらせず、さまざまな活動や人との出会いを通して視野を広げ、たくさんの気づきを得た貴重な体験として成長の糧にしてほしいと願っています。

2023年度ゲース学術奨励賞受賞者

人文学部	国際英語学科	榮田 莉子
	日本文化学科	八方 詩恩
人間生活学部	生活デザイン学科	馬越 穂乃香
	管理栄養学科	中野 夏紀
	児童教育学科	松村 愛美



2023年10月3日 ゲース学術奨励賞授与式にて

中学・高校

8・6平和祈念式・平和記念礼拝

宗教教育委員会 金 清洛

8月6日午前10時より、ご遺族・関係者の方々を交えて平和祈念式が行われました。中学茶道部の献茶、中学礼拝委員会の各クラスで折った千羽鶴の献納、追悼の言葉を三谷院長・竹内路子同窓会長、女学院在校生を代表して中学3年3組の池亀帆香さんが述べ、最後に中学YWCA部のハンドベル演奏を聴きながら献花をしました。関西学院大学の学生なども参列しました。

午後1時30分からは、中1、中3、高2の生徒が出席し、8・6平和記念礼拝を捧げました。講師の大塚善子さんは広島女学院中学高等学校在籍中にキリスト教と出会いクリスチャンとなり、卒業後は大阪にある中高の国語科教諭として働かれました。被爆前の4歳の時に疎開され被爆の体験はありませんが、当時広島の中学校に勤務していたお父様の体験の話やご家族・親戚の方々の被爆経験を通して、原子爆弾の投下による被害やその被害による差別など、戦争がもたらした実像について、貴重な話を語ってくださいました。

8・6平和記念礼拝
大塚善子さん

8・6平和祈念式 池亀帆香さん追悼の言葉(全文)

私は、広島生まれ、広島育ちで、幼い頃から平和学習を行ってきました。しかし、中学生になって新たな平和学習を進めていく中で、今までの私の平和学習には何か欠けていることに気づきました。

そのきっかけは、聖書です。女学院での平和学習と、聖書は、私にとっての「平和」を語る上でなくてはならないものです。その2つの要素を押さえながら、私にとっての平和とこれから取って行きたい行動を、お話ししたいと思います。

まずは、聖書についてです。聖書を本格的に読む前は、神様やイエス様のことが詳しく書かれている書物だと思っていました。しかし、実際に聖書を学んでみるとそうではなく、弱い人間が中心として書かれていました。そのような聖書の話の中で、「放蕩息子」という例え話があります。

この話では、「人間はみんな罪人(つみびと)である」という教えが、親子を通して描写されています。この話は、今でも、強く自分の胸に刻まれています。なぜなら、これをきっかけに「自分も罪人(つみびと)の一人であるのだ」という、当事者意識が芽生えたからです。「自分は罪人(つみびと)である」と思ったことがなかった私にとって、驚きと残念な気持ちが、複雑に入り混じった気持ちになりました。1年生のときに学んだこの聖書の教えがずっと胸に引っかかり、2年生になってもそれは変わりませんでした。

そんな中、平和学習で、日本以外の国における、原爆投下に対する考え方を学びました。特に私にとって忘れられなかったのは、アグニュー博士と被爆者の対談の様子です。

アグニュー博士とは、アメリカの原爆開発のプロジェクトに参加したアメリカの物理学者です。彼の言葉で一番心に残ったものが、「私は謝らない。」です。この言葉を聞いたときに、私の中には「失望感」が生まれました。なぜなら、「人間は罪人(つみびと)である。」という聖書の教えが頭に浮かんできたからです。アグニュー博士の発言から、人は立場によっては人を殺しても罪悪感を感じないことがあることを知りました。そこで、人間が人間を大切にできない様子を、私は罪を感じました。その瞬間、今まで文面でしか見たことがなかった、聖書の教えが、一気にリアルになったように思いました。

私は、「そのような社会で、人間はやり直せるのだろうか。」という失望混じりの問いが浮かんできました。しかし、そこで諦めるのではなく、平和へ近づくために何か手をうつ必要があると思いました。聖書の教えと、アメリカの原爆投下に対する見方。それらから見出した、平和へ近づくための手段は、「人間同士で向き合い、お互いの細かい部分を知っていくこと。」です。

今まで話した内容も踏まえ、そう思うに至るまでの経緯をお話ししたいと思います。

まず、先程話した「放蕩息子」を初めて知ったときに、悪いのは弟だけだと思いました。なぜなら、彼は遊び呆けて、父親から与えられた財産を使い果たしていたからです。それに比べて、兄はきちんと働いているように思いました。私は、そのような兄は、何も間違っていないように思いました。しかし、実際に兄は話の中で、父親に不満をぶつけています。遊び呆けて帰ってきた弟を、父親は歓迎していたからです。視点を変えると、兄も弟と同じ、父親に背く存在に、一気に変わりました。

そのことから、立場や視点によって、驚くほど自分の常識が覆されることを実感しました。それに加え、アメリカの原爆投下に対する考え方を学んだときにも、同じことを実感しました。私はずっと、原爆投下は間違っていると思っていました。しかし、「広島」という枠を越えて当時の原爆投下を見つめたとき、原爆投下を正当化する考えに必ず出会います。

ここで私は、自分にとっての「正しい」と他の国や人物の「正しい」は全く異なっていることを理解しました。戦争は、「お互いが『正しい』と思ってやっている」という話は何度も聞いたことがあります。しかし、私も同じように思い込みをしていることには気づきませんでした。私ひとりだけの思い込みは、世界全体から見ると、とても小さなものだと思います。しかし、戦争は、ちょっとした誤解でも起きうる可能性があります。だから、自分はとても危険なことをしていたことに気が付きました。また、それと同時に、この危険な思い込みをなくす必要があると思いました。では、そのような「正しい」という思い込みを避けるにはどうしたら良いのでしょうか。

まず、結論から話すと、相手の心情に寄り添うことが大切だと思います。人間の心情はとても複雑で、短時間で理解できるものではありません。だから、相手の心情は、膨大な時間をかけてでも手探りで考え続ける必要があります。そうして初めて、相手の心情が見えてくるのではないのでしょうか。相手の心情を理解することは和解に繋がります。言わば、戦争はとても大きな対立です。その対立を避けるためには和解をする必要があります。もし、今地球上で起きている対立を全て和解に変えることができれば、それは平和の実現につながると思います。

私が思う平和な世界とは、人間ひとりひとりの思いに真摯に向きあえる世界。そして、そこに希望を与えられる世界だと思います。

聖書では、罪人(つみびと)において、「赦し」が唯一の希望とされています。私は神様のように、無条件に全ての人を赦せる自信はありません。そんな私は、ひとりひとりの人間の心情を理解しようとするだけでも、平和な世界へと繋がれると思います。

とにかく、戦争によって恐怖にさらされている人たちのために、何か希望を与える必要があります。私はこれから、原爆投下は二度としてはならないとする考えを広めていきたいです。そして、ひとりひとりの被爆者の思いを自ら、紡いでいきたいです。

私のそうした行動が未来への希望になってくれることを、切に願っています。

2023年8月6日 在校生代表 3年3組 池亀帆香

中学・高校

中学高等学校における宗教行事

宗教教育委員会 金 清洛

平和を祈る週間(6月19～24日)

6月24日(土)の特別礼拝では、フセイン・ハルドゥーン(HUSSIEN Khaldoun)先生をお迎えしました。シリア・ハマ市出身で、現在は東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師を務める傍ら、平和問題を扱うジャーナリストとして活動をされています。

礼拝では、「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。」(ローマの信徒への手紙15章1～2節)の聖書箇所を選ばれ、「シリアから鑑みる平和への道しるべ」と題してメッセージをいただきました。日本にとってはほとんど未知の国であるシリアの紹介やその現状について、日本人が持つ中東の国々、とりわけシリアのイメージと、シリアの方々が持っている日本のイメージを用いて、両国におけるステレオタイプ(先入観・固定観念)について語られました。

シリアは人類最古の文明の発祥地のひとつであり、古代シルクロードでは重要な拠点となるなど、地政学的にも豊かな環境であることを紹介して下さいました。一方で、2011年に始まった内戦がもたらしたものと戦争の脅威について言及されました。シリアでの戦争・紛争の傷跡はすさまじく、家族同士でも敵の立場になって生死をかけて戦うこともあること、どのような立場の人にも悲惨な結果しか生み出さないことをご自身の体験を交え、絞り出すように話して下さいました。そのような最悪の状況の中でも多くの国からの支援があり、それがシリアの子どもたちの支えとなっているだけでなく、生きる希望を失っている子どもにも生きる意味を与えていることなどを具体的に説明しながら、ともに築く平和のあり方について語られました。

週間中には様々な「昼の集い」の企画があり、中学では上空通路を「女学院平和ロード」に見立て、各クラスで作成した平和へのメッセージを展示しました。また、登校時に礼拝委員会の生徒と先生が校門のところであいさつ運動を行い、朝から笑顔があふれる光景が見られました。高校では高3宗教委員の生徒が「聖書の登場人物で好きな人」アンケートを実施したり、高1・2の宗教委員は「ありのままの私」というテーマをもとに、先生へのインタビューを実施するなどしました。キリスト教や強調週間のテーマをよく捉えた企画でした。

中1のバイブルデイキャンプ(10月5日)

今年のバイブルデイキャンプは、開会・閉会礼拝の他に、第1部では映画「ジーザス」鑑賞を、第2部では生徒によるゴスペル礼拝が行われました。初めての試みであるゴスペル



中1バイブルデイキャンプ

礼拝では、生徒による奏楽・演奏・合唱に合わせて、聖書の授業で学んだ讃美歌以外のゴスペルを歌ったり、聖書科教諭によるクラス別クイズ大会のような形式でのメッセージがあり、ホール全体が一体となって楽しめる新鮮な礼拝となりました。

キリスト教強調週間「ありのままの私を愛して」沢知恵(TOMOE SAWA)



沢知恵「ありのままの私を愛して」

主題「ありのままの私を愛して」、主題聖句はコリントの信徒への手紙一13章13節のもと、11月13日・14日は通常の授業に替えて、主題講演と学年ごとの特別プログラムが実施されました。主題講演師の沢知恵さんは、1971年神奈川県に生まれ、日本、韓国、アメリカで育ち、1991年東京芸術大学音楽学部楽理科在学中に歌手デビューしました。最新作『花はどこへ行った』など29枚のアルバムを発表し、第40回日本レコード大賞アジア音楽賞を受賞しました。

生後6ヶ月の頃より、ハンセン病療養所の方々と関わりを持ち、今日に至るまでハンセン病について「覚える・伝える」ことを志として、コンサートなどを用いた様々な活動を続けています。最近、テレビや新聞でも報道されるほど、広く活躍されています。

今回の講演は、『うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史—園歌はうたう—』(岩波書店2022)の著書のもと、2日間にわたって素敵な講演が行われました。「歌」と「お話」が主となる講演はコンサートのような演出で行われ、「涙あり・笑いあり」の心温まる感動に包まれるひと時でした。お話の中ではハンセン病で苦しめられた方々の歩みのもと「ありのままの自分を愛すること」の意味、各々の違いを認めつつ隣人と関わることの意義について語られました。また、ハンセン病だけでなく弱い立場に置かれているあらゆる人々に視野を広げること、共に生きる喜びを分かち合うために私たちがなすべきこと、即ち「関わる」ことについても話して下さいました。質疑応答の時間では中高生の様々な質問に丁寧に答えて下さり、最後は讃美歌「いつくしみふかき」を生徒とともに大合唱しました。

学年別活動では「隣人と共に生きる」というテーマで、中学生は主に体を動かして実践活動を、高校生は様々な講師の先生方との出会い(高2・3)、クラス別活動(高1)に従事し、それぞれがテーマについて考える時間となりました。

閉会礼拝(11月18日)では各学年から2名ずつ強調週間の感想を発表し、お互いに得たものを分かち合い、豊かな1週間であったことを再認識できました。

キリスト教強調週間
学年別活動で来年度の
新中1へのメッセージを書く高3

中学・高校

レジリエンス

～2023年度 中学高等学校のグローバル教育を振り返って～

グローバル教育推進部 野中 理恵

2023年度は、ようやくコロナ禍以前の水準でグローバル教育関連のプログラムを実施することができました。国内外からたくさんのお客様をお迎えし、平和公園内の碑めぐり案内や核兵器廃絶の署名活動、Peace Forumを実施しました。また、前号でご紹介した春休みの海外研修プログラムに加え、夏休みには中学3年生と高校1年生の17名がオーストラリアで語学研修とホームステイのプログラムに、高校2年生のGlobal Issues選択生2名がアメリカで開かれたCritical Issues Forumに参加し、ヒロシマで学ぶ中高生としての使命感を持ってそれぞれの地を訪れ、かけがえのない経験をして帰ってきました。それに加え、今年度初めて本校が参加し、世界への新たな扉を開いた取り組みがありましたのでご紹介いたします。

UCL Japan Youth Challengeと呼ばれるこのプログラムは、世界の大学ランキングでトップ10に入るUniversity College London (UCL) 主催の、日英の高校生のためのサマープログラムです。「長州ファイブ」と後に称され明治新政府樹立の中心となった伊藤博文や井上馨らは、海外渡航が厳しく制限された時代に渡英してUCLで学びました。それから150周年にあたる2015年にスタートしたものです。今年は7月21日から30日の10日間、選抜を経た日本の高校生

とイギリスの高校生約100人が、世界を先導する最先端の研究を行う研究者と交流し知見を深め、ディスカッションやプレゼンテーションを行いました。

今年度のテーマは「レジリエンス」。「困難にぶつかってもしなやかに回復し、乗り越える力」という意味を持っています。コロナパンデミックを経験し、世界中で改めて注目を集めている言葉です。参加生徒たちは、自分たちの学校や街についてプレゼンテーションするという課題が与えられており、本校から参加した3名の生徒たちは、広島女学院と平和都市ヒロシマの歴史を「レジリエンス」という切り口で紹介しました。イギリスの高校生もいる中で、英語力の差に圧倒されながらもしっかりと思いを伝えることができ、参加者からたくさんの賞賛の言葉をいただけたことは、生徒たちにとって大きな財産になったことと思います。

自然災害、戦争、パンデミックなど多様な課題を抱えている世界の中で、予測不能な問題に直面した後、柔軟かつ俊敏に回復できる社会が求められています。広島女学院のあゆみそのものが、レジリエンスであることを参加生徒たちと再認識し、苦難の中、神様と共に働き広島女学院を守ってこられた先人たちに、改めて敬意と感謝を感じる研修となりました。

また生徒たちは、この研修を通して、様々なバックグラウンドを持つ参加者たちと、互いの文化について学び、親睦を深め、生涯の宝となる経験をしました。今後も広島女学院から、長州ファイブのようなレジリエンスを備えたグローバルリーダーが巣立っていくことを期待しています。

写真で見る行事



6月14日 体育大会 (選手宣誓)



6月14日 体育大会 (リレー)



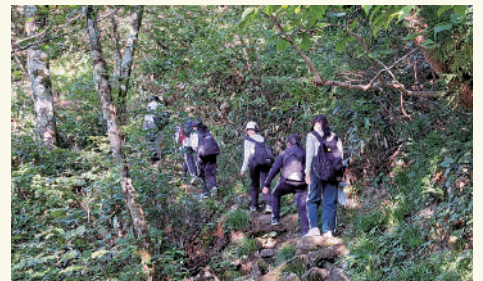
6月17日 グローバル研修発表会



6月24日 平和を祈る週特別礼拝
講師 平井・ハルドゥーン先生



7月17日 るんるん女学院



9月7日～9日 チャレンジキャンプ 恐羅漢 (山登り)



9月7日～9日 チャレンジキャンプ 恐羅漢
(キャンプファイヤー)



11月3日 文化祭 (ホール発表)



11月3日 文化祭 (美術部)

幼稚園

あゆみの会主催子育て支援講演会

園長 古重 歌織

2023年度をスタートさせて、子どもたち、保護者と園が信頼関係を築きながら歩みを進めている1学期。34年間（内10年園長）という長きにわたってゲーンズ幼稚園の歩みを支えて下さった鈴木道子先生をお迎えして念願かなって6月13日にあゆみの会（保護者会）主催の講演会開催が実現いたしました。

「AI（人工知能）時代に生きる子どもたちの心を耕す子育てとは」と題して、現代を生きる子どもたちは、情報過多な世の中であるにもかかわらず、読解力の乏しさが指摘されている中、その原因の一つとして幼児期に良い絵本との出会いの機会が減ってきていることを挙げられていました。絵本は、身近な大人に安心した雰囲気の中繰り返し読んでもらうことが重要で一緒に楽しみ、通



笑顔でメッセージを送る鈴木道子先生

じ合う喜びを共感することこそが自尊心を育てることに繋がるのだと、そして子どもたちが自分の関心に集中できる時間や場所を十分に確保すること、その経験を仲間と共有し合うことなど、様々な保育経験を語りながら心を込めて沢山のメッセージを送って下さいました。

おとまり会
～心の中は宝物でいっぱい！～

教諭 古本 紗也

年長組はこの3年間はデイキャンプ形式でしたが、今年は7月21日、22日に幼稚園でおとまり会を行いました。4年ぶりのおとまり会、今年度のテーマは『つくりだす』です。この日を待ちに待っていた子どもたち。登園後、集まりで一日の流れを確認する中で「何して遊ぶ?」「楽しみだね」とおとまり会に期待を膨らませていました。

会の最初に、3クラス集まってホールで平和礼拝の時を持ち、パルチコフ先生の被爆バイオリンの音色に耳を傾け、平和をつくり出すことに思いを馳せました。

その後は、各クラスでの活動に移り、時間の枠にとらわれることなく様々なものを協力してつくることを存分に楽しみました。1泊2日を大好きな仲間と共に過ごし、思いを伝え合い、どうすれば上手いくのか試行錯誤しながら沢山の遊びをつくり出しまし



お手製の竹の器を手に「たくさんそうめん食べるぞ!」

た。夜は、過ごし慣れた保育室に布団を敷き詰めて眠りの時をもち、友だちと一緒に特別な朝を迎えました。

友だちとの関係が深まってきた時期でのおとまり会で、仲間や保育者と共に色々なものをつくりだした大切な2日間。このかけがえのない経験は子どもたちの心の成長に大きく繋がり、心の中の宝物が増えたことと思います。

笑顔あふれる親子ふれあい運動会

教諭 橋本 佳南

10月14日に開催したふれあい運動会は、学年ごとに行っていたふれあい運動会を、4年ぶりに3学年合同で行いました。年長は、パラバルーンの演技とリレー、年中少は、普段クラス活動の中で楽しんでいる音楽に合わせて歌ったり体を動かしたりする表現の演技と、かけっこをしました。目の前を走り抜ける仲間の姿を見て、「〇〇ちゃん頑張れー!」と応援や拍手を送ったり、「パラバルーンきれいだね」「やってみたいな」とそれぞれの学年の表現を互いに楽しむ経験を得られました。たくさんの保護者が見ている中で、緊張している子もいましたが、親子で一緒に体を動かすプログラムもあり、終わりの会には、素敵な笑顔がたくさん見られました。運動会後の日々も、表現で楽しんだ歌を友だちと一緒に歌っ



笑顔いっぱい、競技を楽しむ子どもたち

たり「よーいどんしよう!」と園庭を元よく走ったりと遊びの中で、運動遊びの延長線上に様々な活動が展開されています。

学年を超えて繋がりを深め、運動会に集った皆さんと子どもの姿を共有する大切な時間になりました。

幼稚園

収穫の感謝と喜びでいっぱい

教諭 今井 あい

実りの秋です。園庭の葉っぱは鮮やかに色づき、様々な形のどんぐりがどっさりとなりました。恵み豊かな自然に子どもたちの心は踊り、おまごことや制作活動など、様々な遊びが深まっています。

今年度も有志の保護者によるご協力のもと、子どもたちと一緒にサツマイモやニンジン、ダイコンなどの野菜を苗や種から育てました。年長児は田起こしからの米作りや、種から育てた藍を収穫しての藍染も経験しました。神様の守りの中で育ちゆくいのちを大切にお世話し、時には虫や鳥たちも分け合い、ついに泥だらけになりながら自分たちの手で収穫した時の喜びにあふれた表情からは、神様からの恵みと愛の導きを感じます。11月には収穫した野菜やお米を囲んで収穫感謝礼拝を守りました。子どもたちとともに、たくさんの秋の恵みを味わいながら、感謝と喜びをもって過ごせたことをとても幸せに思います。



おおきくなったね、うれしいね

花束、誰にプレゼントしようかな

家族でじっくり ゆったり たっぷりと

教諭 白石 恵史

学期に1度開催しているファミリーデー。11月にも2回に分けて開催いたしました。在園児はもちろん、卒園児や未就園児など様々なご家族が来園され、保育室やホール、園庭、ぼうけんの森などを開放し、たっぷり遊んでいただきました。自然体験活動アドバイザーの菊間馨さんとは、大学構内を通り、ぼうけんの森を抜けて園に帰ってくるコースを散策し、秋の自然に触れました。ホールでは伝承遊びの名人、中島昭雄さん、馬場礼子さんが遊びコーナーを設けてくださり、からくりが魅力的な江戸独楽を見せてくださり、独楽の回し方を教えてくださいました。様々なご家族がお好きな場所で過ごし、普段の園での遊びを保護者と共有したり、久しぶりに友だちと再会したり、卒園後の近況を保育者と分かち合ったり、また保護者同士の交流の場となったりと、とても有意義なひと時となりました。神様のお導き、お守りに感謝です。



大人も子どもも江戸独楽に夢中

大学構内で秋見つけを楽しみました

早稲田ふれあいまつり

教諭 加茂 真衣

11月中旬、早稲田公民館にて行われた第19回早稲田ふれあいまつりの舞台発表に年長組の有志の子どもたちが参加しました。「わせだらんまん みんなのフェスタ 2023」をテーマに4年ぶりの開催となったこの祭りには地域の小学校や中学校、早稲田公民館を利用しているグループの歌唱や器楽演奏、ダンス等の舞台発表の他、水引小物作りや将棋ができる参加体験コーナー、展示や飲食コーナー、バザー等があり、小さな子どもから大人まで笑顔溢れる楽しい1日となりました。

ステージでは「どんぐりころころ」「きのこ」等を含む秋の歌メドレーと地域の方々に感謝の気持ちを込めて「ありがとうの花」を歌いました。慣れない場所での発表に緊張していた子どもたちですが、最後には笑顔で歌うことができ「楽しかったからまた出た



早稲田のみんなに心を込めて「ありがとう!」

い!」という声もありました。沢山の人の前で歌う緊張と楽しさ、そして地域の方との触れ合いが子どもたちのこれからの成長に繋がっていく感謝の気持ちを持って過ごせることを願っています。

— 法 人

◆ 広島女学院創立記念日の恒例行事

1886年10月1日は、砂本貞吉氏が、米国南メソジスト監督教会の宣教師ランバス博士父子の協力を得て広島市西大工町に女子塾「広島女学会」を開いた日です。広島女学院では、この日を「創立記念日」と定め、各校部の教職員が一堂に会して「広島女学院全学院研修会」を開催しています。今年は、この日が日曜日となっていたことから、研修会を別の日に各校部ごとテーマを定めて開催しました。

大学では、9月30日に「トランスジェンダー当事者・家族の声を聴く」と題し、トランスジェンダーの現役大学院生、トランスジェンダーの性自認をもつお子さんの保護者、自分の体や心の「性」について悩んでいる子どもたちとその保護者のためのコミュニティスペースを運営している「ここいろhiroshima」の3組の方を講師にお招きし、それぞれの体験や考え方、活動状況などのお話を聞かせていただきました。その後、「私たちが口を閉ざして知らないまま、誤解したままではなく、是非この機会に、疑問や思いを伝えること」を講師の方々にご了解いただき、短い時間ではありましたが、本音の部分での質疑応答をさせていただきました。まさに、「ここに集う一人ひとりが、人や思い、知識などと出会う場」であったと感じることができる研修会となりました。

中学・高等学校は、9月30日に、日本基督教団の牧師であり、広島大学総合科学部・人間社会科学部教授の辻学先生をお迎えして、創立記念礼拝を持ちました。中学、高校共、初代校長ゲンス先生の大切にされたことを通して、自分の置かれた場所を越えて行ける、そのような生き方を覚えることができました。

幼稚園は、8月24日に「キリスト教保育の歩みの中で聖書を語る保育者の役割とは」と題し、広島流川教会の向井希夫牧師を講師にお迎えし、研修会を開催しました。日々の礼拝は、各担任が言葉を手渡す役割を担っており、その中で礼拝の持ち方や聖話を語る際に疑問や不安に感じていることを共有し合い講師の向井先生からのメッセージを通して学び合う時を持たせていただきました。また、創立記念日の10月1日には、広島流川教会の主日礼拝に全員で参加し、こころを合わせ祈る時を持ちました。

(法人事務局管理部総務課)

被爆七十八年広島女学院平和祈念式

2023年8月6日、広島女学院中学高等学校ゲンスホールにて被爆七十八年広島女学院平和祈念式が執り行われました。今年のご遺族をはじめ、関西学院大学の学生やピースセミナー参加学生など約160名の方が参列され、慰霊碑に刻まれた350名の生徒、教職員に思いを致し、共に平和を祈りました。

(法人事務局管理部総務課)



◆ 湊 晶子 前院長・学長

日本キリスト教文化協会キリスト教功労者ご顕彰

2023年10月23日、第54回キリスト教功労者顕彰式において、前院長・学長の湊晶子先生が日本キリスト教文化協会よりキリスト教功労者としてご顕彰されました。

これは、キリスト教関係の宣教・教育・社会・福祉・出版など文化の発展やキリスト教思想の普及に貢献のあったキリスト教信者を顕彰する賞であり、本学院関係者では、第6回に松本卓夫氏、第16回に広瀬ハマコ氏、第20回に日野原重明氏がご顕彰されています。

このことは広島女学院にとって大変名誉であり、実に誇らしい受賞です。当日、顕彰式の会場である日本基督教団銀座教会に私も足を運び、同窓会東京支部長の坂下さんやご家族とともに先生の受賞をお祝いし、喜びを分かち合いました。ますますお元気で活躍を願っております。

(院長・学長 三谷高康)



顕彰式にてスピーチをされる湊晶子先生(撮影/石渡菜々子)

◆ 客員教授スティーブン・リーパー氏
谷本 清 平和賞受賞

広島女学院大学客員教授であるスティーブン・リーパー氏が、第35回谷本清平和賞を受賞されました。この賞は核廃絶や平和に貢献した個人や団体におくられるもので、広島から世界に向けての平和への発信に長年取り組まれていることが、この度高く評価されました。

(法人事務局管理部総務課)

同窓会からのお知らせ

2024年 ホームカミングデー開催のお知らせ

テーマ 『輝くゆくて』

- 日時／2024年4月20日(土) 10:30～13:30
- 場所／リーガロイヤルホテル広島
- 会費／10,000円

2024年 ホームカミングデー実行委員会

高校 23、短大 22、文英 5、文日 5
高校 33、短大 32、文英 15、文日 15
高校 45、文英 27、文日 27
生文 1、生食 1、生環 1

お問い合わせ / 同窓会事務局
TEL・FAX 082-221-1059
(月)～(金) 10:00～15:00



こちらから
アクセス
いただけます

法人

◆ 寄附

1月10日受付分まで。
(順不同・敬称略)

広島女学院のために

- 100,000円 湊 晶子
- 10,000円 匿名
- 3,000円 田原 真弓

広島女学院大学のために

- 2,500,000円 三谷 高康
- 250,000円 匿名
- 100,000円 上田 愛香
- 30,000円 瀬良 紀子
- 8,979円 桐木 建始
- 8,979円 松本 滋恵

中高教育充実のため

- 250,000円 匿名
- 50,000円 戸田 潤子
- 49,999円 前田 保子
- 30,000円 山地 佐和子
- 20,000円 前田 瑞枝
- 3,000円 坂森 和彦

広瀬ハマコ記念奨学基金として

広島女学院大学のための奨学金及び奨励金として

- 20,000,000円 匿名

広島女学院メソジスト女性局奨学金給付型として

- 1,000,000円 公益財団法人ウェスレー財団

ゲーンズ奨学金として

- 800,000円 広島女学院同窓会

奨学金制度の充実

- 100,000円 井上 富紀子
- 50,000円 匿名
- 50,000円 匿名

教育研究施設・設備の充実

- 50,000円 戸田 潤子

グローバル教育の発展・充実

- 30,000円 周藤 玲奈

被爆ヴァイオリンの維持・修繕のために

- 30,000円 一般社団法人ヒロシマ国際作家協会
- 30,000円 新協建設工業株式会社
- 12,000円 松野 迅
- 10,000円 ひろしまかがり灯の祭典
- 2,500円 有限会社ナミキジャンクション

食堂運営補助費として

- 1,000,000円 広島女学院大学協力会

ガウン・帽子・フード保管料として

- 285,065円 広島女学院大学協力会

アイリスセンター維持のため

- 600,000円 広島女学院同窓会

VISHバスキャッチシステム年間利用料として

- 118,800円 広島女学院ゲーンズ幼稚園
みぎわ会

歴史資料館へ寄贈

ドレス一着(ノーベル平和賞授賞式関連行事着用)
サーロー 節子

◆ 寄附のお願い

本学院はクレジットカード決済に対応したインターネットからの寄付金募集を行っております。皆さまには引き続き格別のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

詳細は学校法人広島女学院ホームページ (<https://www.hju.ac.jp/houjin/donation/>) をご覧ください。



こちらからアクセスいただけます

お問い合わせ／人事・会計課 TEL:082-228-0387

◆ 次期校長選任

学校法人広島女学院は、第215回理事会(2023.9.29)において、次期校長として渡辺信一氏(現校長)を選任しました。なお、任期は2024年4月1日~2026年3月31日の2年間です。

◆ 人事

採用

- 小林 憲昭 (法人事務局経営企画部経営企画課職員 兼 大学経営企画部学長室職員(常勤嘱託職員)) 2023.6.1付
- 大田 真之 (法人事務局・大学管理部総務課職員(常勤嘱託職員)) 2023.7.1付

退職

- 瀧ヶ平 悠史 准教授(人間生活学部) 2023.8.31付
- 内海 香苗 (入試・広報センター入試・広報課職員) 2023.9.30付

◆ 訃報

- Leslie Pearsall 様 (旧大学教員) 2023.8.31
- 清水 慶秀 様 (名誉教授) 2023.10.10

編集後記

この度の能登半島地震により大変多くの方々が犠牲になりましたこと心よりお悔やみ申し上げます。合わせて被災されました皆さまに心よりお見舞い申し上げます。復旧・復興をお祈り申し上げるとともに、被災されたすべての皆さまが1日も早く元の生活に戻られることを心より祈念いたしております。

今回の冬号では音楽と女学院を特集記事として教育や活動のほんの一部分をご紹介します。音楽によってもたらされる様々な繋がりに感謝するとともに今後も女学院の豊かな歩みとなりますよう力を注いでまいりたいと思います。

2024年も皆さまお一人お一人の上に神様のあたたかい明るい光がいつもつつみ輝きますように。(幼稚園 久保木 裕子)